

崎門学報

創刊号

平成 26 年 10 月 1 日
崎門学研究会



目次

一面 学報発行の趣旨

二面 坪内隆彦氏講演要旨

三面 栗林潜峰『保健大記』

四面 九月活動報告

五面 崎門列伝①

学報発行の趣旨

いまなぜ崎門学なのか

崎門学は江戸時代中期の儒者、山崎闇斎が始めた学問です。その特徴は飽くまで皇室中心主義の立場から朱子学的な大義名分論によつて「君臣の分」と「内外の別」を厳格に正す点にありました。君臣の分は、天皇が主君で国民は臣下であるという序列、内外の別は内国と外国の思想や人種の区別を明確にす

るということです。それは必然的に、内においては徳川の專政、外においては外敵の来寇という内憂外患を乗り越えるための尊皇攘夷思想に行き着き、明治維新の思想的端緒にもなりました。なかでも闇斎の高弟である浅見絅斎などは「終身足関東の地を踏まず」として御所のまします京都で尊王攘夷の教えを説き、その弟子である若林強斎もまた御所の近くに「望楠軒」という私塾を構えて弟子たちに尊王思想を鼓吹したのでした。幕末志士の重鎮である梅田雲浜などはこの望楠軒の出身であり、また望楠学派ではありませんが、越前の大橋本左内や長州の吉田松陰、薩摩の有馬新七なども崎門の学統に連なります。望楠学

派を始め、崎門学は主として在野において育まれ、だからこそ時の権力への阿諛追従を一切許さぬ厳格な行動倫理を保ちえたのです。一方で、三宅觀瀬や鶴飼鍊斎、栗山潛鋒といった闇斎門下が水戸光圀の求めに応じて『大日本史』の編纂に参画したことによつて、その思想は幕末の水戸学、つまりは徳川体制の内側にも深甚な影響を与えました。

では、以上のような性格を有する崎門学を現代の日本に生きる我々が学ぶ意義はどこにあるのでしょうか。

そもそも天孫遼邇云命が天照大神のご神勅によって地上の世界である葦原中國に降臨し、そのご子孫である神武天皇が我が国を建國されて以来、我が国は万世一系の天皇が君臨し、国民と父子同然の君臣関係を育んできました。無論、その過程では、蘇我氏や藤原氏、源平以降の六百年以上に渡る武家政権など、時の権力が天皇と国民との間に介在し、國家の衰乱を来たすこともありましたが、そのたびに、志士仁人が尊王思想を鼓吹して王事に奔走し、その努力は終に明治維新の大業となつて実を結んだのでした。ところが先の

敗戦以来、我が国は、アメリカによつて国民主権や武装放棄を謳う憲法を押し付けられ、その結果、天皇と国民の間における君臣の名分は捨て置かれてきました。また軍事的自立の喪失は、小国特有の事大主義を惹起し、我が国政府は外交的のみならず思想的な対米従属に陥つております。というのも、日米間の安保条約と地位協定によつて、いまも全国に治外法権を有する五万人近い米兵が蟠踞し、畏くも皇居上空の制空権は横田に指令基地を置く米軍に掌握されております。こうした軍事的プレゼンスを背景に、アメリカは我が国に政治的自由主義としてのデモクラシーのみならず、近年では経済的自由主義としての市場主義を扶植し、国内の買弁勢力と結託して我が国における国民財産、民族資本の剽窃を企んでいるのです。

そこで小生は、この国家の衰運を挽回する思想的糸口を上述した君臣内外の分別を高唱する崎門学に求め、兄と慕う月刊日本の坪内隆彦氏と共に闇斎の高弟である浅見絅斎の『靖獻遺言』を読みし、更にはその感動の昂揚を禁ずること能わず、今日における崎門正統の近藤啓吾先生に師事してその薰陶を得たのでありました。最近では同じく崎門学の重要文献である栗林潜峰の『保健大記』を有志と輪読しております。

目下の安倍政権は、シナや朝鮮に対する旧来の軟弱外交を改め、我が国領土主権の護持を唱えておりますが、主権は既に朝廷の元を離れ、中朝を防衛するために「日米同盟」を強化すればするほど、かえつて一層の対米従属を招き、それによる国威の失墜が中朝の我が国に対する侮りと侵略を助長するというパラドックスに陥つております。また安倍政権は米製の市場主義イデオロギーに加担し、TPPへの参加や移民の受け入れを含む労働規制の緩和などの自由化路線を推し進めておりますが、これは市場における我が国の政策

学報創刊記念講演会

講師 坪内隆彦氏

（『月刊日本』編集長・当会顧問）

過ぎたる平成二十六年八月十日、本崎門学報の発刊を記念すべく、『月刊日本』編集長で当会顧問の坪内隆彦氏に千葉県浦安市内でご講演を頂いた。以下はその要旨。

御講演要旨

演題 『新自由主義の脅威』

保守論壇の大勢は安倍政権支持であり、従つて新自由主義路線に対する批判は少ない。対して『月刊日本』は一貫して新自由主義を批判している。ここで言う新自由主義、ネオリズムとは市場万能主義、つまり政府の管轄を極力市場に委ねる考え方であり、シカゴ校

講演の様子

新自由主義の本邦である
アメリカでは、あらゆる公的
サービスが民営化されてい
る。それが極まつた社会がい
かなるものかは、三橋貴明氏
が監修した『顔の見えない独

・トガ（回転扇）」と呼ばれる官能の人材交流を通じて、政府の政策決定にまで強い影響を与えて いるのである。

「ボリビアの水戦争」として外資は撤退している。これはした。その後、政権は崩壊し外資運動が起り、それは死者の発生を伴う大暴動にまで発展した。

さらに新自由主義による公的サービスの民

「生の勅語」として時の桂太郎首相に下された勅語にも明らかである。そして万民を撫育し、給うその大御業は、少数に富が偏重し、大多数が困窮を強いられる新自由主義とは相容れないものである。

問題なのは、かくのことき性格を有する對
自由主義的政策を我が國に導入した場合、そ
れが我が國の國体と矛盾することにある。固
知の様に、我が國の國体は一君万民であり、そ
の天皇が民の寵を氣遣つたように、君主を
大御心は、明治四十三年に天皇が「施療再

裁者』で描かれている。そこでは膨大な医療費のために、保険の未加入者は救急車すら呼べず、災害発生時は人命救助が営業の採算性によって決まる。健康や安全など生命に直接関わる公共サービスまでもが、市場の原理で動かされるようになるということだ。

卷之三

周知のように、竹中は、かつて小泉政権の閣僚として自由化政策を推し進め、民主党政権では息を潜めていたが、安倍政権の誕生によつてゾンビの様に蘇つた。現在では、産業競争力会議や国家戦略特区諮問会議で民間の議員を務め、安倍政権の政策決定に影響を与えてゐる。また彼は万年野党と称する団体を作り、政府の政策を監視し、政治家を格付けするなどしているが、警戒が必要だ。（以上）

接待施設で知り合つたとされるからである。仁風林と呼ばれるこの接待施設には、政官の要人が出入りし、その中の一人である田村厚労相（当時）は、同施設で接待を受けた直後に、労働政策の大転換を打ち出し、結果的に労働移動を円滑化する事業への予算が2億か

ハソナタバコの会長を務め、新自由主義による労働市場の自由化から利益を得ていて、パソナと政権の癒着が一般に膾炙したのは、昨今のASKAの麻薬事件が発端である。というのも、この事件でASKAと共に逮捕された棚内香澄美容疑者はパソナの社員であり、ASKAとは元麻布にあるパソナの

あるアメリカの企業連合がオバマ政権を使喩したものに他ならない。そして、かくして生じた米国からの外圧に内応する日本側のレントシーカーの筆頭と目されるのが竹中平蔵である。竹中は表向き慶大教授の肩書を使用しているが、その一方では人材派遣会社であるパソナグループの会長を務め、所自由主義ニ

谷秦山『保健大記打聞』

を読む① 折本龍則

『保健大記打聞』を読む

平成26年2月4日より、有志で『保健大記打聞』の輪読会を始めました。『保健大記』(以下『大記』と略す)は崎門学徒である栗山潜峰(1671~1706)の著作であり、『打聞』とは、同じく崎門の谷秦山が『保健大記』を注釈した講義の筆録です。『大記』は、元禄二年(1689年)の発刊、我が国における保元、平治の乱以降の歴史を説き、その糸余曲折のうちに不变の人倫を見ることによって、武家台頭による皇威失墜の原因を洞察いたしております。また、それは取りも直さず、徳川政治に対する根源的な批判と、いつの日か訪れるであろう皇威回復への庶幾に発するものであります。崎門学では、この『保健大記』を重要な文献に位置付け、若林強齋先生も、同著を崎門学を学ぶ上で、北畠親房の『神皇正統記』に比肩しうる必読文献であると述べておられます。ちなみに本輪読会テキストとしては『保健大記打聞編注』(杉崎仁編注、平成21年、勉誠出版)を採用することになりました。以下では輪読会の報告を兼ねて本書を読み進めて参らうと思いますが、その前に、まず『保健大記』とその著者である栗山潜峰について今一度説明をしておきましょう。

『保健大記』と栗山潜峰

『保健大記』の著者である栗山潜峰は元の名を長沢成信といいます。長沢氏の先祖は上野に発し、その後丹波に移ったとされますが、父の良節は淀の城主石川氏に仕えて儒を講じていました。潜峰14歳のとき京都に上って桑名松雲に弟子入りし、以後十年に亘って師事しましたが、その際、潜峰と松雲を引き合わせたのは父良節と親しかった鶴飼鍊齋とされています。鍊齋は松雲とともに山崎闇斎の弟子でありましたから、良節は鍊齋の勧めによつてその子を松雲に従学せしめたのです。かくして潜峰は松雲を通じて山崎闇斎に始まる崎門・垂加の学を修めることになりました。

そんな折、転機が訪れます。当時、京都にいる御西天皇の第八皇子である八條宮尚仁親王がましまし、幼くして学を好み英邁を予感させましたが、当時14歳でこの尚仁親王と同年齢であった潜峰は、鍊齋の推薦によつて親王に近侍することになつたのです。恐らくはご学友の意味を以つての近侍であったのでしょうか。またこのとき、師の桑名松雲も親王の顧問に備わり、潜峰や雲松の存在を通じて闇斎門下の俊秀が親王の下に參集しました。

かくして潜峰が18歳のときに、著述して尚仁親王に献じ奉った書が『保健大記』であります。ときに元禄元年(1688年)のこと

であります。この『保健大記』は後年の改定による書名であり、当初は『保平綱史』と題しました。題名の『保健』は保元と建久であり、本書の内容は潜峰の厳格な史的考証と簡潔な筆致によつて、大体保元から建久に至る三十八年の間ににおける朝廷の衰微と武家の台頭の次第が記されています。大体といつたのは、厳密には本書の記述が保元元年の前年である久寿二年に始まつてゐるからです。この久寿二年は後白河天皇が御践祚遊ばされた年であり、本書の記述は建久三年、天皇の崩御を以つて終わつております。

このように、表題としては通常「保平」でも良さそなものですか、敢えて「保健」に改題したのは、潜峰が歴史の根本に道徳を仰ぎ見ており、当時に至る武家の專横が朝廷内部における道徳的墮落、なかんづく後白河天皇の失徳に多く起因することを重く見てゐるからであります。またかくの如くでありますから、本書の内容は朝廷衰微の道徳的動因の解明に主眼が置かれ、国家禍乱の俑を作つた暗君乱臣賊子には仮借ない筆誅が加えられております。

この直言不諱の態度については、仮初にも

谷秦山小伝

皇室に対する不遜不穏として憚る向きもありますが、平泉澄先生は「第一に事實を直視して真相を把握しようとする学者の良心から出た事である上に、第二には諷諫をたてまつて帝徳を輔翼し奉らうとする忠誠の至り。左近五世の孫重元三子を生む。伯を重正と曰(三面続き)、ひ仲を重次と曰ふ。季は即

ぬ」と述べておられます(「保健大記と神皇正統記」)。

崎門学によつて君徳を涵養せられ前途を嘱望せられた尚仁親王でありますたが、潜峰が『保健大記』を捧呈した翌年の元禄二年、俄に薨去し給いました。御歳僅かに十九の若さでした。その後、潜峰は京都柳馬場に隠遁して悲嘆の内に学問を続けましたが、やがて元禄六年、二十三歳のときに、またしても前述した鶴飼鍊齋の推薦によつて水戸光圀に禄仕することを得ました。元禄十年には若干二十七歳にして水戸彰考館の総裁に就任しています。かくして彼の余生は大日本史の編纂に捧げられ、水戸学中興に与つて力がありましたが、後病を得て寛永三年四月七日長逝し、駒込の龍光寺に葬られました。享年三十六歳。

『保健大記』の原文は高度な漢文で書かれてゐるため、そのままで読むのが困難ですが、幸いにも前述した谷秦山による講義の『打聞』によつて現代の我々はその内容を理解することができます。ここにいう谷秦山とは何なる人物でありますか。『秦山集』に収録された漢文の小伝を以下に読み下します。

先生名は重遠、字して丹三郎と称す。谷氏秦山は其の号。土佐長岡郡豊岡村の人。其の始祖を左近と曰ふ。長宗我部氏に仕へ顯名有り。左近五世の孫重元三子を生む。伯を重正と曰(三面続き)、ひ仲を重次と曰ふ。季は即

ち先生なり。先生寛文三年癸卯三月十一日を以つて生まる。性学を好み強記絶倫幼にして小学四書舅島崎氏に受く。眼を過れば忘れず。又常通寺に入り守信法印を師とし法華經を読む。未だ両月に満たず誦を成し延宝七年六月年甫て十七上京して浅見けい斎に謁し十月山崎闇斎藤に謁す。二儒の学洛中を主とし大義名分を説くこと極めて厳正と称す。先生既に二儒之教えを受け帰る。後屡々書を修めて益を請う。間断有ること無し。国守山内豊房公其の篤学を嘉し賜ふに廩俸を以てせんとす欲するも辞して拝せず。天和三年先生謂らく読書勤業は郊居に如かずと。移つて泰山に住し元禄元年父重元卒す。家貧にして葬すること能わず。二兄職を奉じて外に在り先生代わつて几筵を奉ず。孝友の情想うべきなり。七年書を渋川春海に寄せて天文暦算を学ぶ。春海は闇斎の弟子にして夙に出藍の称有り。初め先生星曆を闇斎に問うも闇斎卒するに及び春海の門に遊ばんと欲す。府司允さず。故に書を寄せて之を学ぶなり。八年、新たに渉天儀を鑄す。衡機各三尺、尤も簡明と称す。十年夏春海歴術の印可を授く。十三年先生学術已に優れ門人又多し。而して益々之を研かんと欲し香美郡山田野に移る。十五年豊房公終に廩俸を賜ひ移つて城下に居らしむ。府員延聘して講を聴く者常に六十人に下らず。而して公私の応接日夕に違あらず。先生其の志業の廢を廢すことを恐れ十六年請て山田野に復る。宝永元年東遊して春海を駿河台に訪ぶ。

此の行や過る所の山川宿駅皆之を詠歌す。畿内の社寺遊観せざるなし。東遊紀行二巻を著す。三年、是の先先生国内を巡行し式内二十一社の湮没せるものを考定し案を具て之を上る。此に至つて命を受け案を齎して京師に至り諸をト部兼敬卿に訂す。卿之を可とす。豊房公二十一社を造替せんと欲し有司に先生と之を議せしむ幾ばくも無くして公館を捨て議遂に罷む。四年命有り先生を禁錮す。其の罪名を審らかにせず。ひそかに謂ふ。當時幕府林信篤に命じて聖廟を建て文学を興し絃歌の声所在に起る。而して儒臣学士大義名分を曲解し甚だしきは冠覆倒置の言を為して以つて天朝を侮蔑するに至る。世人察せず以つて当然と為す。蓋し時勢爾かるなり。先生の学、已に闇斎絅斎の上に駕し其の大義名分を説くこと糸絲紊れず。以つて一国人士の心を感孚するもの有り。当路の人蓋し之を説かず。公の館を捨つるを機とし之を排陥するなり。先生既に禁錮せられ毫毛も怨尤の色無し。星宿を認め十有二年一日の如し。享保三年六月晦以つて終る。年五十六。嗚呼先生既に時に遭わず。命又長からず。満腹の経綸施為する所無くして歿す。豈慨嘆に勝ゆべんや。然りと雖も一国惑学の効、世を累いで益驗あり。遂に勤王の唱首を以つて大いに顯るに至る。蓋し先生の志業は當時に屈して後世に伸ぶ。偉なりと謂ふべし。著する所の書某某、皆子爵千城君の家に藏む。子爵の泰山集を刻する

平成26年9月活動報告

9月1日 栗山潛峰先生墓参

『保健大記』の著者である栗山潛峰先生の墓所がある駒込の龍光寺（臨済宗東福寺派）を訪ねた。境内で質素に佇む先生の墓石の左隣には、『大記』の序文を撰した三宅觀瀾の墓石、そして右隣には鶴飼金平こと鶴飼鍊斎の墓石が並んでいた。鍊斎は山崎闇斎門下で、潜峰を八条宮尚仁親王に、そして親王薨去の後は、水戸光圀に紹介した人物である。

9月2日

第二十回『保健大記打聞』輪読会開催

9月23日

第二十一回『保健大記打聞』輪読会開催

に当り豊多に嘱して之を謄写し之を校正し且先生の小伝を為して其の後に繋げしむ。豊多不敏不文其の伝を為んこと素より其の人に非ず。然れども豊多子爵の眷顧を蒙ること此に三十余年義辞すべからざるもの有り。謹んで其の梗概を叙して上ると云ふ。

明治四十三年十一月十五日

安房松本豊多謹誌

拘幽操—放伐思想の防波堤

崎門列伝① 山崎闇斎

坪内隆彦

崎門学の祖山崎闇斎は元和四（一六一九）年十二月九日、貧しい鍼医の子として京都に生まれた。十五歳にして臨済禪の名刹、京都の妙心寺に入つて僧になり、禪学の究明に専念した。十九歳になると土佐の汲江寺に入つて天朝を侮蔑するに至る。世人察せず以つて当然と為す。蓋し時勢爾かるなり。先生の学、已に闇斎絅斎の上に駕し其の大義名分を説くこと糸絲紊れず。以つて一国人士の心を感孚するもの有り。当路の人蓋し之を説かず。公の館を捨つるを機とし之を排陥するなり。先生既に禁錮せられ毫毛も怨尤の色無し。星宿を認め十有二年一日の如し。享保三年六月晦以つて終る。年五十六。嗚呼先生既に時に遭わず。命又長からず。満腹の経綸施為する所無くして歿す。豈慨嘆に勝ゆべんや。然りと雖も一国惑学の効、世を累いで益驗あり。遂に勤王の唱首を以つて大いに顯るに至る。蓋し先生の志業は當時に屈して後世に伸ぶ。偉なりと謂ふべし。著する所の書某某、皆子爵千城君の家に藏む。子爵の泰山集を刻する

「道を求める人であり、道の実践者であつた」という視点こそが最も重要なだと考えられる。特に、孝子たるの念こそが闇斎の思想と行動の根本にあつた。佛教から儒教へ、そして神道へという外面向的な遍歴にのみ目を奪われてはならないということである。

闇斎は、当時の儒者が中国を尊び日本を卑しむことに抵抗し、わが国の国体の尊厳を力説した。闇斎はあるとき門人たちに向かって、「今もし中国が、孔子を大将とし孟子を副将として数万の騎馬を率いて日本に攻めて來たならば、我々のように孔孟の道を学ぶものは

どうすればよいか」と質問した。門人たちとは誰もこれに答えることができず、「私たちはどうしてよいか分かりません。先生のご意見をお聞きしたいのです」と言つた。すると、闇斎は次のように語つたという。

「不幸にしてこのような厄災に遭つたならば、我々は身に鎧をつけ、手に武器を執つて彼らと一戦し、孔子・孟子を擣にして国恩に報いるより外はない。これこそが孔孟の道である」

この言葉こそ、崎門学の核心である、君臣の大義と内外の別という両面に支えられたものだつた。闇斎はまた、孔孟の道を学びつつも、国体に合致しない湯武放伐論を退けた。放伐思想に対する防波堤として闇斎が注目したのが、『拘幽操』である。武王の父、西伯昌（後の文王）は、紂王の暴虐を諫めたが、その怒りにあつて獄舎「羑里」に幽囚されてしまつた。しかし、王を動かすことができなかつた自らを責めるだけで、主君を恨もうとはしなかつた。この文王の孤忠を、唐の文豪韓退之がうたつたのが、以下に掲げる拘幽操（羑里操）である。拘とは獄中にあること、幽とは幽暗のこと、操は琴曲のための歌であることを示している。

目 省窅たり。其れ凝り、其れ盲ひぬ。

耳 肅肅たり。聴くに声を聞かず。

朝 日出でず。夜 月と星とを見ず。

知ること有りや、知ること無しや。
死せりと為んや、生けりと為んや。

嗚呼、臣が罪、誅に当たれり。天王は聖

明なり。

「羑里」は都から遠く離れた場所にあつて、人も通はず、鳥の声さえ聞こえないような場所だつた。

闇斎の高弟浅見絅斎の講義に従つて説明す

ると、「窅窅」とは、目がおちくぼんで見えない様子で、「其れ凝り」は、水が冰つたよう凝り固まつてゐる。獄中は月日の光もなく、菖蒲さえもわかないので、目の働きを失つてしまい、目が見えなくなつてしまつた。「肅

肅」とは、秋の氣色のものさびしい様子。菖蒲さえ見ることができないが、せめて訪れる人の声くらいしそうなものだか、訪れる人もいない。朝の日の光も、夜の月、星の光も見えない。だから、意識的であろうと、無意識的であろうと、また死んでいるといおうか、生きているといおうか、全く言語に絶する惨憺たる困惑状態にある。それでもなお紂王が愛しくて、いても立つてもいられないという心情だ。これこそが眞の忠である。

垂加神道を樹立

闇斎は、伊勢神道を引き継ぎ、さらに吉田神道など広範な神道思想を集大成して自ら垂加神道を樹立した。闇斎は、明暦元（一六五五）

年に、「伊勢大神宮儀式」について、「少しも仏事を混えていない。なんと万代の龜鑑ではないか」と称えた。これに続けて闇斎は、「嗚呼、神は垂るるに祈祷を以て先と為し、冥は

加ふるに正直を以て本と為す」（別の訓みあり）と述べているが、これが「垂加」の二字の典拠である。

闇斎は、伊勢神道が重視してきた「心神」に注目した。「心神」は、自分の心に神の御靈が宿つておられるという意味である。闇斎は、わが心神が天神から与えられたものであるとともに、天神に連なるものであることを確信した。近藤啓吾先生は、闇斎が「心神」がわが内なる天神（天人一貫）であつて、祖神の靈と自己の靈とが、ひとつながりの生命の流れの中にある（祖孫一体）という信念を持つに至つたと説明している。

闇斎は、「心神」の具体的的事実を大己貴命（大國主神）の説話に見出した。天孫降臨に先立ち、経津主神・武甕槌神の二神から国土の献上を勧められた大己貴命は、いつたんはこれを断つたが、それが高皇產靈尊の意志だと知り、直ちにこれを献じ、自らは端の八坂瓊杵を身につけて隠れられた。近藤先生が指摘する通り、闇斎は、大己貴命が高慢な態度を反省し、これを改めることができたのは、眞実の自分の存在、つまり「心神」を発見したからだと理解したわけである。そして、あらゆる物をことごとく天孫に献上し、退居して天

孫と國土との守護に任せられた大己貴命に、利害の念や功名の心がなく、ただ生死を越えて、所期の具現への祈願だけがあつたことに、闇斎は神道の根本義を見たのだ。

大己貴命の説話に「心神」の具体的的事実を

見出す過程で、闇斎は『神代卷口訣』を著して闇斎は、寛文十一（一六七一）年八月、吉川惟足から吉田神道の伝を受け、十一月には垂加靈社の靈号を受けた。さらに、靈社号を授けられた翌日、闇斎は『藤森弓兵政所記』を草している。「弓兵政所」とは、延暦十三（七九四）年に藤森神社が桓武天皇より授かつた宝称である。『日本書紀』を編纂した舍人親王を奉祀する藤森神社に、闇斎が初めて詣

でたのは明暦三（一六五七）年正月のことだつた。このとき闇斎が知つた伝の一つ「五文字の法」には、『倭姫命世記』の語「神垂祈梼・冥加正直」の八字を書す、とあつた。闇斎は、藤森の伝承に「敬」の本義を発見したのである。闇斎が、この「つつしみ」の具現と考えたのが、舍人親王が『日本書紀』を編纂するに当り、古來の伝承をすべて集めてこれを紀し、敢て取捨を加えなかつた謙虛な姿勢である。闇斎は『藤森弓兵政所記』においてこの「つつしみ」がわが国の歴史を貫いて秀麗の国がらを成し、それを以て開闢以来、神皇の正統が永く続いているのであり、これが天照大神の勅したまうところの本意だと説いた。

闇斎は、主に『日本書紀』「神代卷」については『神代記風葉集』を、「中臣祓」については『中臣祓風葉草』を編纂したが、舍人親王の編纂態度と同様、広く先学の諸説を蒐集するという姿勢を貫いたのである。